

PHYSOR 2024 参加報告

原子燃料工業 竹石 太一

2024年4月20日から24日にかけて米国・サンフランシスコにて PHYSOR 2024 が開催されました。私は名古屋大学との共同研究で取り組んでいる POD による次元削減手法を用いた炉心計算の高速化の研究成果を発表するため、関西国際空港の国際線ターミナルにてサンフランシスコ国際空港への直行便の入場が始まるのを待っていました。

私は学生時代に一度国際学会に参加したことがありましたが、オンライン形式でした。修士の期間とコロナ禍の期間が完全に重なっていたためです。スライド発表は録画した動画データを送付する形式で、学会当日はテーマの近い他の発表者の動画を研究室でいくつか見るのみ。私の初めての国際学会はあっけなく終わってしまいました。

とはいえ、私は海外にそれほど興味もなく、むしろ不安の方が大きかったので、「パスポート無しで国際学会参加の実績が出来てラッキー」という程度に感じていました。院試に必要な TOEIC の点数が最低限とれていれば英語はもう十分、あとは機械翻訳の発展を信じよう。そんなことを思いながら卒業し、NFI に入社しました。

徐々に仕事にも慣れ始めた2年目の冬、共同研究の成果を PHYSOR で発表することが決まりました。「初めての海外出張」というイベントに対し非常に大きな不安がありましたが、発表経験はありますし、同行してくれる先輩に頼ればアメリカでの道中も何とかかなると思い、どこか気楽に構えていました。

「竹石君って国際学会参加したことあるよね？ 一人で行って来て欲しいんだけど」

社内で海外出張の計画を調整していた先輩のその言葉に、私は啞然としました。実態の伴わない実績は大抵マイナスに働くということを私はこの時身をもって知ったのでした。

そんな不安を抱えながら乗り込んだ飛行機の中は、ほぼ満席ですが日本人の姿はほとんど見られません。隣の席もアメリカ人のようです。まだ日本国内のはずなのに既に緊張しつつ、私が前の座席の下に入れたリュックから iPhone の充電器を取り出そうと四苦八苦していると、突然隣の席から声が上がりました。どうやら私に何か話しかけているようです。しかし、ネイティブの滑らかな発音と突然のシチュエーション、内容の見当もつかず一単語も聞き取れなかった私は、ぎこちない愛想笑いを小さく返すことしかできませんでした。

このあたりからすでに暗雲は立ち込めていたのですが、初日は現地の英語を満身に聞き取ることがほとんどできませんでした。入国審査官の言葉もほとんど聞き取れず、

ホテルのチェックインで受けた流暢な説明もほとんど聞き取れません。例外はホテルのwi-fiのパスワードについてでした。ここは聞き逃してはいけないポイントだと本能が察知したようで、途切れ途切れの英語でなんとか確認が取れました。人間、本当に必要なものに対する努力は出来るようで、この会話がこの日唯一手ごたえのあったコミュニケーションでした。その後ホテルの自室にたどり着いたところで私の精神力は底をついてしまい、無事勝ち取ったパスワードでネット接続ができることを確認してから、機内で抱えた睡眠負債を完済する為にただ眠りました。

翌朝。外が明るくなってくるとホテルの目の前にある駅から地元名物のケーブルカーが発車するのを告げる軽やかな鐘の音が聞こえてきます。

サンフランシスコは大きな通りを挟んだその左右に碁盤の目状に都市が広がる街で、スケールの大きい街並みと西海岸のカラッと晴れた空気に開放感を覚えました。異様に坂道が多く、まっすぐ通った通りに反して地形はダイナミックに立体的だったのも印象的でした。もともと高低差のある土地をゴールドラッシュによる人口増加に応じて短期的に開発したのがその理由だそうです。



サンフランシスコの街並み

学会初日は夕方から行われたオープニングレセプションから参加しました。コロナ禍での学会しか知らない私にとっては立食パーティー形式のイベントが開かれていることも新鮮で、皆さん活発に交流されていることが印象的でした。会場では協賛企業のブースもいくつか開かれており、手持ち無沙汰だった私は一つのブースで話を聞いてみることにしました。炉物理に関する単語はある程度見慣れているためか、資料を追いながら相手の話す内容の概要は理解することが出来ます。しかし質問を英語に起こして話すことがなかなか出来ません。しどろもどろに単語を組み合わせて質問してみると「ちょっと分からないけど……僕も英語が母語ではないから、うまく説明できなかったみたいでごめんね」と言わせてしまい、申し訳ない気持ちになりました。もちろんその申し訳ない気持ちもうまく英語で表現は出来ず、私は日本人らしくぺこぺこ頭を下げながらその場を後にしました。渡米前の私は研究テーマに関連する論文をいくつか精読して国際学会対策のつもりとしていましたが、まず必要だったのは専門的な英単語を覚えることでも深い炉物理知識でもなく、自信を持って基本的な英会話フレーズを使えるようになる訓練だったようです。英語さえ話せば様々な国の方と交流できたのという後悔がありました。

一方、会場では日本の研究者や学生さんと話すことができ、心細さも幾分解消され、見知らぬ土地での緊張感は徐々に解けていきました。会話の中で、知り合いの参加者の紹介や、今後の業務で参考になるかもしれないセッションの情報など、様々な情報を教えて頂きました。おかげでより有意義な時間を過ごすことが出来たと思います。

各セッションの聴講時は、スライド上の文面を追って発表内容についていくことで精一杯でしたが、さまざまな発表を聞くことで徐々に耳が慣れる感覚がありました。最終日には会場の雰囲気にもすっかり慣れ、比較的落ち着いた気持ちで自分の発表を迎えることができました。また同じセッションには共同研究を担当されていた名古屋大学の遠藤先生とその学生さんの発表も予定されており、声をかけてもらい緊張をほぐすことができました。そうして様々な方に助けて頂きながら、自分の発表はつつがなく終わることが出来ました。質疑応答では相手の質問を完全に聞き取ることは出来ませんでした。遠藤先生のフォローを頂きながらコミュニケーションをとり、話す英語は依然として拙いものの、準備していた補足スライドを活用して何とか理解していただけたと思っています。



最終日、バンケットでの食事

今やオンラインでなんでも済ませることが出来る時代ではありますが、今回の国際学会参加を通して、世界中の技術者が集う場で直接コミュニケーションを行うことの意義を実感することが出来ました。出発前は不安ばかり感じていましたが、振り返ってみると様々な得難い経験をすることが出来て良かったと感じています。海外の動向に対してアンテナを立てるモチベーションになりましたし、より広い世界・情報を知るためのツールとして、英語力の重要性を強く感じました。

私と同じように海外にあまり興味のない学生の皆さん。この文章を読んで「私も行きたいな」とは思わなかったかもしれませんが、案外社会人になっても海外に行く可能性は十分ありますので、機会があるなら学生のうちに複数人で国際学会に行くことをお勧めします。必ずしも同行者が英語に堪能でなくとも、近くに日本語が通じる人が一人いるというだけで安心感は桁違いです。月並みな表現ですが、確実にあなたの世界を広げるチャンスになるはずです。

最後になりましたが、現地で助けていただいた皆さんにこの場を借りて御礼を申し上げます。学会中はまるで学生のような心持ちで過ごしてしまいましたが、次は頼れる社会人として振舞えるよう精進していきたいと思います。